

論文の和文要旨

論文題目： 言語学習動機づけ診断尺度の開発とその展望

氏名： 長沼 君主

文部科学省により 2001 年 1 月に発表された「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」の報告では、動機づけの重要性が強調され、動機づけを高める具体的な方策が示された。また、2002 年の 7 月に発表された「英語教育改革に関する懇談会」の「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定についての報告でも、主な政策課題の 1 つとして、学習者の動機づけの高揚が取り上げられ、英語を使う機会の拡充や入試等の改善に関する具体的な指針が示された。

このように英語学習における動機づけに関する社会的関心が高まる一方で、応用言語学および心理学の分野においては、動機づけに関して様々な理論的枠組みが作られ、動機づけの特性やその学習に及ぼす影響が研究されてきた。それらの研究は非常に多岐にわたり、これまでに動機づけの持つ多様な側面が明らかにされてきている。また、それにともなって、そのように細分化した動機づけを分類し、整理しようとする試みも少なくない。

しかしながら、第 2 言語および外国語学習における教育的有用性を考えると、こういった様々な理論を知っているだけでは不十分であり、実際に生徒の動機がどのような状態であるのかということを知る必要が出てくる。その上で初めて、何が生徒の動機を失わせ、学習を阻害しているのか、どうしたら生徒の動機を高めることができるのかを、それらの理論に基づいて考えることができる。すなわち、そのような理論的見地にもとづいた動機づけの診断尺度の作成が望まれるのである。

そこで本研究では第 2 言語習得及び外国語学習に関連する動機づけの測定尺度を概観し、それらにおいて測られている動機づけの様々な特性を考察した。また、第 2 言語習得研究における動機づけの研究だけでなく、心理学における関連する研究も参照することにより、より広範な動機づけの特性を含めることを目的とした。その上で、実地調査研究を経年で行うことにより、実際のデータに当たりながら、言語能力の発達と言語学習動機づけとの関連を調べた。また、言語学習動機づけの診断にあたっての実践面に関する考察も行った。

本論文は大きく 3 部から構成されている。第 1 部では言語学習動機づけの診断にあたって、動機づけの状態を解釈するために必要な動機づけ研究の理論的側面を概観する。概観するにあたっては、第二言語習得研究および心理学における動機づけの構成概念の比較検討を行う。第 2 部では第 1 部での理論的考察から得られた知見をもとに、言語学習動機づけのプロセスをモデル化し、既存の尺度を参考にしながら、実際に言語学習動機づけの診断尺度開発を行う。第 3 部では開発された診断尺度を実際に用いて、言語学習動機づけの縦断調査を行う。調査にあたっては、言語能力テストスコアとの関連も調べ、言語能力の発達に寄与する動機づけの要因を明らかにする。

第 1 部の理論編の第 1 章では第 2 言語習得研究における統合的動機づけと道具的動機づけのパラダイムと、心理学における内発的動機づけと外発的動機づけのパラダイムの比較を通して、関連する諸概念を概観し、言語学習に特有の動機づけの要因の理論的特徴を考察した。言語学習における社会的文脈として、言語環境、学習環境、使用環境の 3 つを取り上げ、言語環境においては、第二言語環境と外国語環境での目標言語文化への態度から、統合的動機づけの性格が変化し、また、道具的動機づけもその社会的な意味づけが変わることにより性格が変化することを示した。それに対して、学習環境では、形式的な学習環境と、非形式的な学習環境とがあることを踏まえた上で、物質的な学習環境と人的な学習環境のそれぞれの観点から動機づけに影響を及ぼす要因を取り上げ、統合的・道具的動機づけ以外の側面からの動機づけの変化を示した。そして、使用環境ではコミュニケーション欲求といった、また違ったタイプの動機づけを取り上げ、言語環境と学習環境をつなぐものとしての位置づけを示した。

第 1 部の第 2 章では第 1 章で扱った内発的動機づけ研究に深く踏み込み、自律性に加えて、近年注目されている関係性の概念の考察を通して、言語学習の動機づけの根底にある基本的な欲求や動機づけの仕組みを考察した。またその試みの中で、第 2 言語習得研究でも重要視される動機づけの社会文化的側面についての考察も行った。有能感から始まった内発的動機づけ研究が、自己決定理論を核として、自律性を中心概念と据えた研究へと展開し、さらに社会的要因をも扱う上で、関係性の概念を取り入れ、理論的に進化してきた過程を追った。そしてその中で社会的価値の内在化による外発的動機づけの自律的動機づけへの変化の過程にも触れ、多様な価値の間での葛藤について考察した。

第 2 部の尺度開発編の第 1 章では、まず始めの第 1 節で、理論編で扱われた動機づけ

の諸要因を言語学習のプロセスにあてはめ、学習のどの段階でどのような要因の影響を受けるかを示し、言語学習動機づけのモデル化を行った。モデルの中心には内発的動機(欲求)が存在し、それが具体的な行動を伴った動機づけに至るまでに、様々な個人的、社会的要因が影響することを図示した。そして第2節ではモデル上の様々な要因を測定する既存の尺度を概観し、言語学習の文脈にあてはめた上で整理統合を行い、言語学習動機づけ尺度の開発を行った。その上で第3節では要因間のバランスにより、学習者を言語学習動機づけに基づいてタイプ分け(類型化)し、その動機づけ的特徴を明らかにする。またあわせて、要因相互の関係の比較検討も行った。

第2部の第2章では第1節において、診断尺度の運用において問題となると思われる教室環境特有の動機づけの要因を探るため、教室観察とインタビューに基づいた質的研究を行い、第1部の理論編で扱った、関係性の及ぼす影響について考察した。その結果、学習者により関係性欲求の充足のパターンに違いが見られることが分かった。第2節および第3節では上記の研究を受け、診断尺度の改訂に向けて、関係性と関連した教室における動機づけ要因を測定する尺度の開発と検討を行った。尺度は大きくポジティブ尺度とネガティブ尺度と分かれた上で、それぞれ被影響性因子と能動(受動)性因子とに分かれた。被影響性は学習環境と、能動(受動)性は使用環境と対応しており、第1部の第1章で見た2つのタイプの社会的文脈における関係性の影響を示す構成概念となっていることが見て取れる。

第3部では言語学習動機づけ診断尺度に関係性関連動機づけ尺度を付け加えた改訂版言語学習動機づけ診断尺度もとに、言語学習動機づけの実態調査を行った結果の考察を行う。動機づけ調査にあたっては、文部科学省指定のSELHi(スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール)校と共同研究を行い、3年間の言語能力および動機づけの経年変化を追った。

第1節ではまずSELHi対象クラスと非SELHiクラスとの対比を行いながら、SELHiクラスの学習者の動機づけの特長を明らかにした上で、1年から3年に学年をあげるに従っての変化を分析した。第2節ではさらに言語能力テストスコアの発達から低上昇群と高上昇群とに分け、その動機づけ的差異を分析し、言語能力の発達に寄与する要因の考察を行った。そして第3節では言語能力診断調査実施にあたっての教員や学習者の内観を紹介し、言語学習動機づけ診断調査の限界と今後の展望について述べた。